

■テーマ展

花巻人形展 —愛玩と美—

会期 平成16年3月2日(火)～5月5日(水・祝)

江戸時代から明治時代を中心に製作され、愛でられた土人形。その生産地は全国約150ヶ所にのぼるといわれますが、なかでも当地の花巻人形は精巧な造形と鮮やかな色彩を特徴にもち、優品として広く知られています。

花巻人形は、伏見人形(京都)や堤人形(仙台)の製法を伝習した花巻市鍛冶町・太田善四郎の創始であり、その歴史は江戸時代中頃にさかのぼると伝えられます。そして、最盛期には太田家のほか、古館家(後に照井家が継承)や苗代沢家、上野家など、複数の店が人形製作に携わるようになり、多くの職人を擁して大量生産をおこなったとされます。しかし、さまざまな玩具が普及するにつれて衰退の途をたどり、高度経済成長期を迎える昭和30年代前半を最後に廃絶しました。

今回の展覧会は花巻人形を一同に紹介し、その愛らしさに加え、人形に託された人々の想い、人形製作の背景を明らかにしようとするものです。また、同時期に県内で生産された附馬牛・高田人形や東北の代表的な郷土人形を展示し、その造形美をお楽しみいただきたいと思います。

花巻人形の題材

花巻人形は、その源流とされる伏見人形や堤人形と同様、大別して次の製作工程をとります(昭和30年調査)。

- ①型抜き…型の多くは表裏(上下)一対の二枚型から成り、これに粘土をつめて抜き出す。型はオリジナルのほか、他所で生産された型、あるいは製品を原型にした型を用いたと目される。
- ②焼成…①を乾燥させた後、窯で素焼きする。
- ③彩色…②の底面に紙を貼り内部を隠す。最後に下地として膠(動物の皮等を煮固めた接着剤)で溶いた胡粉を塗り、さらに彩料(顔料・染料)を施す。その色調は赤と紫を基調とし、極めて特徴的な牡丹や桜などの花紋が描かれる。

こうして完成する花巻人形の種類(作

品)は1000種を超えるといい、その姿には製作当時の文化の諸相を垣間見ることができます。

- ①雛人形…男雛・女雛、五人囃子等
- ②信仰対象や縁起物…だるま、高砂、福助、山神、不動明王、牛頭天王等
- ③昔話…金太郎、桃太郎、山姥等
- ④歴史上の人物(芸能)…橋弁慶、小敦盛、羅生門の鬼等
- ⑤動物…象、ねずみ、兎、猫、犬等
- ⑥市井の暮らし…餅搗き、まとい持ち、乳飲み子、髪結い、万歳等
- ⑦近代文化…日清・日露戦役、ハイカラ、木製垂鈴体操等



盛岡市中央公民館所蔵 花巻人形

ヘラ書きが示す歴史

花巻人形の製作に用いる型の中には、物価や出来事など、製作年当時の情報を詳細に記録したものがみられます。一般に「ヘラ書き」と呼ばれるもので、これは他所の土人形生産地には多く例をみない慣行です。



北上市立博物館所蔵 型のヘラ書き

文政十一年
三月
下米三貫五百文
子六貫八百文
金

『北上市立博物館研究報告』第5号(昭和60年)によれば、ヘラ書きの多くは穀物の相場や作柄を記したのですが、中には百姓一揆や大火、仇討ち等、史実と

符合する記述も認められ、今日では歴史資料としての位置づけもなされています。

附馬牛人形と高田人形

県内における土人形の生産は、遠野市附馬牛や陸前高田市においても確認されています。

前者は附馬牛南部家に仕えた士族・小笠原家の創始であり、幕末から明治にかけて製作されたと伝えられます。



遠野市立博物館所蔵 附馬牛人形

後者は、大正時代に菊池卯吉が東京方面で製作技法を伝習したことに始まると伝えられます。昭和30年代までは2月の市日において販売され、桃の節供(三月節供)を彩るひな人形として飾られました。



館蔵 高田人形

両者は花巻人形と製作過程が異なり、土を焼かずに彩色する方法をとります。したがって、花巻人形より非常に軽く、素朴な味わいが感じられます。

郷土人形の現在

県内で生産された土人形は、いずれも早くに廃絶しました。しかし、その良さが見直されるに至った近年、花巻人形と附馬牛人形は復活を遂げ、再び郷土の顔として親しまれています。

(学芸員 川向富貴子)